

ヘンリー・メイヒュー著・ジョン・キャニング編・植松靖夫訳

『ロンドン路地裏の生活誌』上・下 原書房（一九九二年十一月刊）

小倉 襄 二

I

△下層社会研究▽は、社会問題を考究するときには極めて重要な領域である。△下層社会▽はある種の記号でもあって近・現代の社会問題研究にとってもキイ・ワードともいえる設定だといえよう。社会科学の枠ぐみや社会調査にとってもこの△下層社会論▽は多岐にわたる検証とみのりのゆたかな領域でもある。日本の近代と社会問題研究にとつての古典的な著作としての横山源之助著『日本之下層社会』（明治三二）との関係をもみても明らかである。一方で、さいきん紀田順一郎氏の『東京の下層社会』（一九九〇年・新潮社刊）がいろいろな意味で関心をよんだ。異界論ブームとかかわりはよくわからないが、私には、『陰翳礼讃』のようなもの、たんなる猟奇性だけでは片付けられないものが動いているようにみえて仕方がない。ミラービルや金属、タイルのスミスベシしたビル街から裏町・路地裏へ外れての彷徨のなかに知らぬ間に

『ロンドン路地裏の生活誌』上・下

私たちが喪失したものが立ち返ってくる安らぎがある。戦災や開発をまぬがれて残ったくすんだ町並などそれである。場末とか陋巷といわねばならぬ種々の『辺境』でもある。スラムや被差別部落とまでは規定できないが都市空間に点々と現存している。巷と人のたたずまい、その陰翳には下層社会感覚というかふしぎな魅力と非日常性がまといっている。△下層社会研究▽にはこのような探訪へのいざないもありこうしたアプローチは無視できないものではない。私にとつての世紀末、いまからふりかえつてのヴィクトリア朝の△下層社会研究▽への関心もこのアプローチと無関係とは考えていない。

H・メイヒュー著の本書は『ロンドン路地裏の生活誌』と意訳されている。原著名は John Connig, ed. *The Illustrated Mayhew's London: The Classic Account London Street Life an Characters in the Time of Charles Dickens and Queen Victoria*. London Widenfeld & Nicholson, 1986 年

『ロンドン路地裏の生活誌』上・下

る。本書は、K・チェズニーによる『ヴィクトリア朝の下層社会』（植松・中坪訳・高科書店、一九九一年刊）にも多く引用されているヴィクトリア朝の『下層社会研究』にとって貴重な記録文献の一つである。著者のヘンリー・メイヒュー（Henry Mayhew）は訳者あとがきによると一八二二年十一月二十五日生れ、ジャーナリストと脚本家を志して劇評・政治諷刺画などにすぐれた『フィガロ・イン・ロンドン』誌を編集、父親との確執や紆余曲折のなかで、小説の執筆、一八四九年に本書の内容ともなりのちに『ロンドンの労働』としてまとめあげた。記事として『モーニング・クロニクル』に寄稿、連載を開始、社説で「産業社会の貧民の倫理的・知的・生物学的・肉体的な状況をあますことなく詳細に描写する」と方針がきまり、メイヒューはロンドンを担当した。この期、隣友運動、C・O・Sで著名なエドウィン・チャドウィツの労働者の衛生状態についての調査、フローラ・トリスタンのロンドンへの社会評論、F・エンゲルスの労働者階級の状態についての著作などもこの前後に発表されて『下層社会研究』への関心は高まっていた。掲載された徹底した探訪記事は大きな反響を呼ぶことになった。しかし『モーニング・クロニクル』との関係も不調となり一八五〇年以降の段階でそれまでの記事・資料によって『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の刊行を行う。一八六一年まとめられた『ロンドンの労働』四巻本は、二段組で各巻平均五〇〇頁という大著であった。この著作について訳者の植松靖夫氏は、メイヒューに先立ってマンチェ

スターの貧民街を調査したF・エンゲルスが貧困の物理と物理的環境・情況にも関心をいだいていたのとはちがってメイヒューは人間そのものに焦点をあてているので『ロンドンの労働』からは生き生きした臨場感が読む者に伝わってくる」と要約している。この臨場感とか、個々の下層社会に生きるさまざまな人間像のリアルな描出による扱いが本書の特性ともいえるべきものでさきのアプローチとかさねても世紀末、ヴィクトリア朝のロンドン下層状況の復原ともいえる記述となっている。これらの記録はメイヒューの名を不朽とした。訳者あとがきには、妻に先立たれ、晩年は孤独で寂しい毎日を送っていたようであると述べられている。一八八七年七月、七十四歳、ロンドンで逝去。まさに世紀末の死であった。

II

こうした著作の蒙る運命は予測できないところがある。本書の編者、J・キャニングによると、十九世紀中期ロンドンに生きる貧しい人びとをあつかったヘンリー・メイヒューの独創的な業績が、当然受けるにあたいするだけの評価と注目を、今ようやく受けはじめている。じつはメイヒューが亡くなった一八八七年の時点ですえ、その二十五年も前に完結していた大著『ロンドンの労働とロンドンの貧民』はほとんど忘れ去られていたのである」という。下層社会、その下位文化を探訪し、その方法としてジャーナリストとしてのすぐれた才能による描出、原著では統計資料、一

覽表も多用したが、抽象的分析よりも、人々の生きるかたちが精彩を帯び臨場感にみちて描出された部分に重点をおき、さらに多くの挿絵を加えて本書は編集されている。一読してさきにあげた横山源之助の『日本之下層社会』の探訪を軸とする描写にかさねあわすことができる。記録とか、この書誌としてあらためての評価とこの「方法」は決して無関係とはいえないと思う。本書の内容紹介にあたったA・ブリツグスは、メイヒューが自ら自分の著作がいろいろの点で好奇心をそそるようなもので、このような形容の仕方は、大英博物館の図書室にかじりついていたK・マルクスやロンドン調査を行ったチャールズ・ブリスもしなかった方法であること、メイヒューは「ある人びとの歴史を、その人びと自身の生活によって記録する最初の試み」と考えていた。そして、また、一個人による最初の非公式の生活調査であり、雑誌「ジャーナリズム・小倉」の形で公表された最初の「調査報告書」(グループック)だった」と要約している。そうしたことから、本書はきちっとした序列による構成をとっていない。まるでロンドン下層に生きる人びとの暗色を帯びたモザイクの模様のようにその「生感」に迫っている。読してもそれはまとまりとはならず混沌とした情景描出として印象される。それでいて、これほどヴィクトリア朝、ロンドン下層社会の状況をいまに実感させる書誌は稀れであるといえよう。

内容の項目についてみると上・下巻あわせて六五の項目にわたっている。その代表的なものを要約してひろってみると、路上と

『ロンドン路地裏の生活誌』上・下

か、街頭という場面での遭遇が目立つ。呼売商人、街頭職人、行商する(トロツティング)、呼売する(ホーキング)する人々、屋台商売、劇場、花売り娘、エンドウ豆スープ、魚のフライ、羊の足などの売人、安宿、娼婦、障害者、いんちき商人、古着商、ペティ・コート・レインとローズマリー・レインの街頭商人、スミス・フィルドの中古屋、チームズ川のビール売り、ぼろ、金属商品、骨の買取商人、ごみ回収、路上のユダヤ人とその商売、拾い屋、どぶさらい、煙突掃除人、ネズミいじめ競技場、大道芸人、道化師、老女、乗合馬車の車掌などの諸項目である。原著にはさらにほう大な探訪の記述があるにちがいない。この訳出された項目を追うだけではほとんどその内実は見当がつかないほど多彩である。

たとえば、ここで「呼売商人」というのは青物と魚の卸売市場で商品を仕入れて来て、魚と果物と野菜を商う「街頭商人」だけを示していて、この中には固定式の屋台で商品を売る「立ち売り」の商人あり、巡回区域を歩いて回るものもある。行商タイプの呼売商人は多くの場合、決った巡回区域をもち、それを歩き回るのだが、二マイルから一〇マイルにも及ぶという。呼売は中年になっても、過当競争、買い手と売り手のごったがえし、三個か四個の玉ネギを手にした小さな男の子が人ごみの中にもぐりこんで、隙間とあらば体をねじこんで先に進み、まるで施しを求めているかのように哀れっぱい声で客に売りつけようとしているなど、描写は実に詳細である。路上、街頭ということは家庭も持たず、余った時間を賭博や劇場ですごし、争い、とくに取締の警官とい

さかんに腕っ節を誇る、刺青するものも少なくない……となつてゐる。

安宿も探訪と聞とりの大切な舞台で、不潔・不正・不道德の巢、人間、落ちぶれてしまった時には、とことん落ちて豚になつちまうがよいのさ、安宿はそういう豚の集つて来る小屋なんだよ」という述懐、若者たちの淫らな乱交でみた情景、宿代一泊二ペンス、子ども一ペニー、宿の女将は、二ペンスぶん何か盗むまでは戻つて来たら承知しないといつて追り返すというくだりもある。読みかきの全くできない娼婦、それは十五歳の男の子と「夫婦」になり、泥棒と悪い女にかこまれての売春。また、地域としてのベティコート・レイン、私自身かつて訪れたことのあるイーストエンド、ホワイトチャペル地区の古着、雑貨の露店市の喧騒、多彩な光景も一つの項目にまとめられている。ロンドン下層にメイヒューはユダヤ人に浴びせられる守銭奴、ゆすり、故買屋、売春宿屋、州知事の手先などの悪罵と口論のときキリストに唾を吐きかけて以来、ユダヤ人は涎を出すだけで唾を吐けなくなつたという俗信のことなどを記述する。当時イングランドにユダヤ人口、三万五〇〇〇人、半数の一万八〇〇〇人がロンドンに在住する。アイルランド人のひどい生活への言及もある。煙突掃除人、確固とした一つのグループを作る。人から見下げられ、汚い、ひどい臭いを発散、ほかの労働者ともつきあえない。代々、しかし彼らが世襲とは思えない。煙突の中を上つて掃除する少年がいたころ、掃除夫の数を増加させていたのは、救貧法の教区か

ら徒弟(年季)奉公に出された少年、被救済の貧しい子どもたちは教区の重荷になるので年季奉公に出した。親方に酷使、虐待される。煙突掃除の少年のなかには、体を洗うのは半年に一度、週に一度、二、三ヶ月に一度とさえいわれた。下水道で繁殖するねずみ、それは下層社会の人々の商品で、犬をけしにかけてネズミを噛み殺させる競技に興じたという。街頭で障害をもつ人も、老人たちもとほりもない惨苦のなかに生きた。

内容の詳細はここで要約できないが、その文脈のなかに冷静な「ジャーナリスト」の眼と人々の語り、悲哀と微かな喜びをも語らせている。A・ブリックスはこれをコトバとしては当時使われていなかったがインタヴューだったという。メイヒューはタイプ「層」に下層社会の人々を分離しようとしたが、「路上には、明確な特徴をもった人びとが数多くおり、その人たちは、ある国の国民が別の国の国民と異っているくらい好み、習慣、考え方、信条などの面で他の人びとと大きく異なっている」という認識に到達している。さらに、メイヒューは憂いに沈んだ道化師は、自分の体面を口にし、街頭に多様に生きる下層の人々には、この体面について、救貧法による救貧院などの世話になるくらいなら餓死した方がましという心性をとらえている。一八三四年改正救貧法と貧民から被救済貧民へと烙印(*stigma*)されるヴィクトリア朝の気分もこれらの描写によく映し出されている。児童の教育についての放置、無策への嘆きも付加されている。

III

『ジャーナリスト』、作家の素質をもったH・メイヒューによる本書で、復原／臨場感をもってヴィクトリア朝、ロンドンの底辺下層 (UNDER WORLD) の人々のいとなみと社会状況がくつきりと視えてくる想いがする。

H・メイヒューの方法はいままでいえばボルタージュとかドキュメントと考えていいであろう。ジャーナリズムという点も重要である。ヴィクトリア朝、そしてロンドンの時流と状況を深く凝視したすぐれたジャーナリストの記録ともいえよう。歴史学の研究のなかで、いまあらためて、歴史小説の手法との相関が問われている。歴史の事実に迫り、それを実証や検証するときすぐれた歴史小説にみられる作家の史眼、その意味が重くみられようとしている。H・メイヒューの記録もジャーナリストのドキュメント作品としていまその再評価とともに△下層社会研究▽にとつての基礎的な歴史研究資料となった。

歴史について考える、歴史への愛好であってもいい。それは人それぞれ想像力の問題でもある。ヴィクトリア朝の世紀末、その下層社会について私たちの想像力をかきたてる通路はさまざまである。私自身はミステリーに惹かれていたのでこのメイヒューの描いた世界にかさねてたとえば△切り裂きジャック▽ (JACK THE RIPPER) の情景がある。一八八八年にイーストエンドにおいて数人の売春婦が何者かに連続して切り裂かれて無惨な死を

『ロンドン路地裏の生活誌』上・下

遂げた。この衝撃は事件の迷宮入りとともに『切り裂き魔研究家』(リパロジスト) という研究者グループによって詳細にいろんな角度から検討されてきた。コリン・ウィルソンはとくに著名である。ドナルド・ランベロー著の『十人の切り裂きジャック』(宮祐一訳・草思社一九八〇年刊) (Donald Rumbelow: THE COMPLETE JACK THE RIPPER 1975) はその集大成ともいえるべき著作である。この著作のなかで(見捨てられたロンドン) という項があつて当時イーストエンド全体では約九十万、ホワイトチャペルの人口は約九万人、極貧民は約十万人、人口の一・二五%、その四分の三が女と子ども、貧民は約七万五〇〇〇人、人口の八%、一八五七年、ロンドンには六〇〇〇軒の売春宿、八万人の売春婦と推定、ホワイトチャペルだけで一、二〇〇人……と紹介している。これが切り裂き魔の横行を許した世界であつた。ミステリー作家島田荘司氏はこの事件をベースとした作品『切り裂きジャック・百年の孤獨』(集英社・一九八八年) のなかで、腐臭を放つ古い貸間長屋には一部屋に複数の家族が住み地下室には豚と人間が同居していた。兎、犬、鼠などの密猟者の部屋はもつとひどく毛皮商人に売るため室内で皮を剥ぐのでその抜け毛がもうもうと空中に舞い。妻の内職の糊やマッチ箱の臭いが、台所で腐った魚や野菜の臭いに混じった。それでも住人はめったに窓を開けない。外の臭いも、似たようなものだったからだ」と。切り裂きジャックは、『このやるせない世界に挑みかかるように、うっ積した怨念をナイフに込め、娼婦たちの喉笛を掻き切った』な

どとしてゐる。H・メイヒューの視つづけた情景の惨たる集約ともいえよう。光と影、表と裏、とくにヴィクトリア朝の性モラルの荒涼たるかたちとも深層でかわるものであった。

この切り裂きジャックの世界、コナンドイルによるシャーロック・ホームズの世界、ウイリアム・ブースの救世軍の発進、一世を風靡し、二〇世紀へと展開するミュージックホールと下層民、労働者をまきこむ大英帝国を指向し鼓舞する情熱などもこのモザイク模様につけくわわる。

ヴィクトリア女王が去ってエドワード七世の華麗な戴冠式やパレードの背後、対極点、イースト・エンドを探訪したのは、ジャック・ロンドンの体験による迫力あるルボが『どん底の人びと』(The People of the Abyss 1903)である。H・メイヒューの本書にも通底する名作である。J・ロンドンのこの作品のことはあまり知られていないが歴史研究と文学者のかかわりを考えるうえで、また下層社会論にとっても重要な著作である。

H・メイヒューの本書をはじめとして、ヴィクトリア朝の同時代から今日までのさまざまな下層社会論についての研究書、諸論説、さらにわが国の多くの「下層社会論」の検証などこれからの主題である。このことよって論証、その方法などふくめて社会問題研究における下層社会論の深くひろい意味が解けてくるのではないだろうか。

1993.2.1

—LONDONへ発し日—